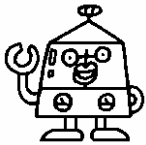


小 / 理科 / 5年 / 生物と環境 /
人と動物のたんじょう / 理解シート

動物によって、なぜ産むたまごの数がちがうの



たまごは子孫を残すために産むので、親になれる割合わりあいが少ない動物ほど、たくさんたまごを産むといえるね。

たまごを産みっぱなしにする魚は、産むたまごの数が多い

産むたまごの数が多いのは、魚のなかまです。いちばん多いといわれるマンボウは、3～7億個おくこものたまごを産みます。ウナギは500万個、ボラは220万個、マサバ、ヒラメ、マダイなどは40～60万個、ニシン、マイワシ、アユなどでは、2～10万個など、ほかの動物とくらべると、びっくりするほどのたまごの数です。

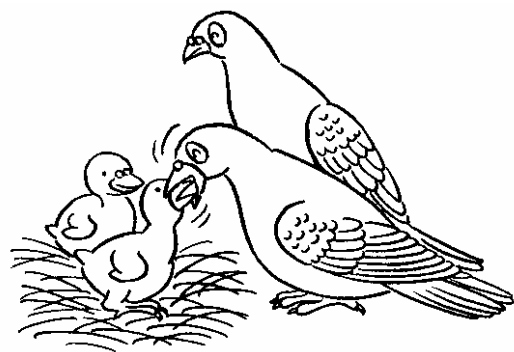
これらの魚のたまごは、水中に産み出されるとすぐ、ほかの魚たちに食われてしまうことが多く、ふ化して子魚こうおになれた後も、たえずえさとしてねらわれ、何万個ものたまごから親になるまで生き残れる数は、大変少ないものです。そのため、たくさんたまごを産むことで、ほろびないで今まで生き残ってきたのです。

安全な母親の体内でたまごがふ化し、子魚になって生まれてくるウミタナゴのたまごの数は20～30個、ネコザメは2～3個と、ぐんと少なくなります。

親が世話をし育てる動物のたまごは、産む数が少ない

ハトやツバメなどの鳥のなかまは、ふつう、親がたまごを温め、ふ化した後はひなの世話をし、てきから守って育てます。そのため、子どもの死ぬ割合は少ないから、産むたまごの数が2～数個と少なくても、子孫を残していけるのです。

体が小さい動物は、体内に入るたまごの数が限られてきますので、いちどに産むたまごの数は、それほど多くなりません。



ひなの世話をするハト